



## 明日へ未来へつながる農業①

地元農家、自治会、行政、JA、下伊那園協、下伊那農業改良普及センターなどが協力し、「原地区モデル営農プロジェクト」が、2007年、飯田市座光寺原地区で始まりました。農家の高齢化や後継者不足、農地の遊休化は、他地域同様、原地区でも深刻な問題となっていました。そこで、同地区をモデルとして、これからの農業と地域づくりを考えていくプロジェクトがスタートしたのです。

「農業同士の絆も弱くなっていたし、何してくれるのって言う人もいたけれど、自分たちが考えてやっていくんだって、まずそこから始まった」と、同プロジェクト事務局の長沼豊さんは当時を振り返ります。修業や経験が必要とする今までの農業から、「だれでもできる農業」へ。（せん）定や枝の片付けもいらず、時間も手間も「省力化」できる新しい農業のスタイルへ。農業の形を変える可能性を持った、リンゴの新しい化栽培への挑戦を決めました。この栽培の普及に携わっている、JA長野県営農センター技術審議役の三村貞美さんが座光寺在住だったことも大きな後押しになりました。



## 地域に元気をくれた 新しい技術へのチャレンジ 「リンゴの新しい化栽培」

原地区モデル営農プロジェクト(飯田市座光寺)

### 農家の跡取りなど 6人が新規就農

3年間、共同で苗木・圃(ほ)場作りに取り組みました。新しい化栽培の苗木は、当時はまだ売られておらず、自分たちで苗木を接いで作るしかありませんでした。農作業の時間をやりくりしての負担のかかる作業でしたが、この行程がお互いの絆を深めるきっかけになりました。「一緒に作業をするうちに信頼関係や団結力が生まれ、地域のことを考えたりする別力も湧いてきた」と長沼さん。圃場は赤土で、掘るだけでも大変な作業でしたが、自治会員も協力し、3千本を植えることができました。

圃場で育てた苗木は今、各農家の畑に植え付けられ、本格的な収穫は来年度以降を見込んでいます。2010年には、栽培農家による「南信州チロル会」が発足。新規就農者もベテラン農家も共に学びながら活動しています。「新しい化については、誰もが初心者。レベルは一緒。心強い、取り組みやすい」と長沼さんは話します。プロジェクトがスタートして4年目。同地区ではこの1〜2年で、農家の跡取り

### 垣根のようなリンゴの木



原地区モデル営農プロジェクト事務局の長沼さんが管理するリンゴ畑

長野県果樹試験場

新しい化栽培の果樹園は、従来とはまったく違った景観が広がります。10㎡に200本を目安に定植します。植え付け間隔は70cmから1.3m。実に栄養を送って育てるため、幹は従来の木のように太くはなりません。木を育てる必要がないため、2年ほどで収穫を見込めるそうです。実の大きさも従来並み。実の重さで枝が下へ曲がっていくため、狭い間隔でもたくさんの苗木を植えつけていくことが可能で、木が充実してくれば、垣根のようになるそうです。高さも2.5〜3mほどなので、管理や収穫も楽に行えます。冬場の剪定もほとんど必要ないため、枝拾いの手間もかからず、高齢者や女性、新規就農者にも扱いやすい果樹と言えます。「南信州チロル会」では、初つがる、シナノドルチェ、シナノゴールド、シナノスイート、ふじを栽培しています。



記事に関する問い合わせ ● 飯田市農業振興センター ☎0265・21・3217



表参道に「りんご並木」  
東京都渋谷区との交流で表参道のキャットストリートに「南信州チロル会」の新しい化の苗木を植樹。プロジェクトから、都会とのうれしいつながりも生まれています

など30〜50代の6人が就農しました。「プロジェクトなどで親が集って元気になったせいもあるかな。息子がやりたいと言っても、前だったらやめろと言っていたかもしれないけれど、こうして地域ぐるみで取り組んでいることで雰囲気が変わったかも。張り合いがあるもの。やっぱり夢がないとだめだね」

それ以前に就農した人も含め、新規就農者9人でグループを作り、新しい化の苗木作りを始めています。さまざまな経験を持つ仲間が違う視点で意見をお互いに合ったり、情報交換をする場にもなっています。「農業は仲間がいないと元気がやっつけられない」。長沼さんは、取り組みを通して、あらためて感じています。